CORE Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

中国プロレタリア文化大革命の虚像と実像

——毛沢東論序説　その2——

全　先　　喬

1.　地におちた偶像

現在の北京政府，華国鋒・鄧小平体制（実質的には鄧小平・華国鋒体制）は，中国現代化にともなう，極端な民主化を排除して，引続き毛沢東思想を堅持する[1]と公言しているが，実際面においては，カリスマ的存在であった毛沢東像を，一般レベルにまで引きさげて，その権威を段階的にうすめていく工作を進めている。

例えば，(1)　従来，新聞の上位欄や，雑誌の表紙などに印刷された，毛沢東の教訓や標語，毛沢東語録の引用文などは，最少限に縮少され，(2)　新聞紙や雑誌の中で，ゴヂック活字で印刷されていた，毛沢東の講話やマルクス，レーニンの言葉は，漸次見うけられなくなっきたことである。

しかも，おもしろいことには，それらの理由として，印刷技術上の問題，印刷用紙の節約の問題という面から取りあげていることであり，いかにも中国らしい，ユーモアに富んだ解説である。

また，過去において，あらゆる種類の新聞，雑誌などに，かかげられていた毛沢東の“詩”と“書”[2]とが，漸次影をうすめ，それに代って周恩来（故首相），陳毅（故外相），朱徳（故党副主席）および葉剣英（現任副首相）たちの，詩や書が，新聞雑誌などに掲載されたり，論集として発行されるようになり，従来毛沢東にのみ許されていた文芸の領域において，独占されていた毛沢東の権威が，ここでも大きく後退して，視覚的にも，形象的にも，民衆の眼前において，一般

レベルまでに引きさげられたということである。

毛沢東主義（思想）を後退させるための，現当局の関心事は，毛沢東を偶像化した讃美や誇張をやめて，冷静な論証をさらに押しすすめることであり，同時に自主的政治思考を損なうような，抜粋教典の暗記学習の中止を告知することにある。また，プロレタリア文化革命以来，政治的非難の論証を行う場合に，広く利用されてきた，毛沢東の文章に内在している法的効果が，否認されはじめた。

社会的対立の中で，論旨の主張が事実かどうかを調べる代りに，毛沢東の言葉の引用によって，互に論敵をやっつけようとする，特殊の精神状態，毛沢東の言葉におどろくほど奴隷的に服従する依存性が，はっきりと否認され，毛沢東思想を歴史的枠組の中で相対化することの必要性が認識されたものと思われる。これらのことは，客観的にみて一つの進歩であり，中国現代化への進展にあたって，それを克服することが必須の条件であることはまちがいない。（傍点は筆者）

注

（1） 毛沢東思想の堅持

1979年3月30日，北京で開催された，全国各界代表 5,000人会議において，鄧小平副主席は，中国が歩むべき道として

1. 社会主義
2. プロレタリア独裁
3. 共産党指導
4. マルクス主義，毛沢東思想の堅持

をうったえて，極端な民主化の排除を指摘したが，中国スポークスマンの解説によると，鄧演説の主旨は民主化そのものを否定したのではなく，社会秩序と法制を重視しながら，着実に民主化を実現していくことに重点がおかれていると。

（2） 毛沢東の詞と書

毛沢東が，詩でなくて，好んで詞（スー）をつくったのは“律詩”や“絶句”よりも，内容を豊富に，表現を広くすることができるからであろう。

彼は現代中国語をとりいれ，“宋詞”以来の伝統をふまえ，古い文化財を吸収，継承して，新しい詩境を創造したといえる。

私は専門家でないので，毛沢東の詞についての評価はできないが，曽って，中国の詩人たちが，詩の一句一句に時の政治情勢のアレゴリー（比喩）を読みとったように，旧中国の伝統的文学者の態度と習慣を，新しい中国の文学者たちが，忠実に継承していることは事実であり，文芸における伝統の深さがうかがわれる。

毛沢東の書法は，正統的な草書体ではなく，唐の張旭の流れをくむ，いわゆる“狂草”といわれるのものである。オルソドックスに対する反逆として，また超克として，革新的な中国の文人たちが好んで用いたところであり，毛沢東もこれを見慣ったものと思はれる。

2. 中国文化大革命

——その真実と愚劣と——

毛沢東の指導により，1966年に，中国プロレタリア文化大革命が発動された。その時点においては，日本の知識人をはじめ，あらゆる国の人々が，深く胸裡に生得的にもっている，反権力的心情が，革命の革命という思想の次元の型をとって，若い紅衛兵たちが，あらゆる権威のある場所に進出して，あらゆる事象について批判し，かつ書き，各地に貼り出した壁新聞の出現したことを，心から歓迎したことは疑いのないところである。

20世紀の歴史の前半において，ロシアのソビエト革命が残した，暗い堕落の汚点，スターリン暗黒政治の血の粛清を，同じ世紀の後半において，中国が，ぬぐいさってくれるであろうと，心から願ったことも事実である。

中国文化大革命の意識の中には，一面では，近代社会の専門化と合理化の矛盾をのりこえて，大衆のひとりひとりに創意を発揮させようとする，鋭い問題提起のあったことは事実である。

しかし，結果的には，毛沢東という，たった一人の人間の偶像化を通じて，精神訓話的な，毛沢東思想，毛沢東語録にたより，おまけに文闘（理論闘争）を主体として，武闘（武力闘争）をさけるべきだとした運動の立前がくずれて，武闘が盛んに行われ，多くの人々の血を流すこととなった[3]。

そして最終的には，軍隊の力を借りてこれを鎮圧し，上海コンミユン[4]によって指向された，社会主義社会の理想像は瞬時にして消えさったのである。

そこで収拾の方式として，軍と革命幹部と労働者＝民衆の三者代表による“革命委員会”なるものが，軍の主導下に設けられて，この組織が以後，文化大革命の推進と調整機関として機能してきたのである。

革命委員会成立後の動きは，一般に知られているとおり，実権派（反毛沢東グループ）の打倒という点にしぼられて，権力奪取闘争の形をとり，そこから生れた政治的，経済的そして社会的混乱が，1976年９月の毛沢東の死，つづいて同年10月の四人組（毛夫人の江青，王洪文，張春橋，姚文元の四名。かれらは毛沢東の側近として，毛の権威を背景に言論機関を握り，政治を壟断した）の追放まで続いたのである。

中国においてプロレタリア文化大革命が始まった当初，訪中した各国の多くの人たちが，一様に報告したところによれば，この革命は，非党員の抑圧的な党組織に対する必死の抵抗，権力エリートへの大衆的造反として出発したこと。およそ権力に生じやすい腐敗や官僚主義を取りのぞくための，大衆の造反と政治参加を目的としたものであった。その意味においては，ソ連もやらなかった大実験，言うならば，近代国家機構のマイナスに対する，いわば予防革命というべき世界的な問題が提出されたと思われた。

文化大革命の経緯をみると，先述のとおり本来民主化のはずの革命が，無政府主義的な武闘におちいり，毛沢東の権威の強化と，軍力の介入以外には，くいとめられなくなった悲劇的様相が，そこに見られる。そして，すさまじい真実と愚劣がまざりあっていることがわかる。しかし，このような歴史的実験にともなう混乱は，さけることのできないものであることも，また事実であろう。

最近における，鄧小平副主席の働きによって，旧実権派の人々が名誉を回復して，党，政府の要職に復帰しているが，その中の一人の元副総理陳雲（経済担当）

は，文化大革命を批判して（痛烈な中にもユーモアを交えて）次のように発言している。

“もしも，毛沢東が，1956年に死んでいたら，彼は疑いなく中国人民の偉大なる指導者として，全党，全軍，全人民の心から敬愛する革命指導者。また，全世界のプロレタリア革命の偉大な人物となっていただろう。

もしも，1966年に死んでおれば，その功績は，いくらか割引されたにしても，まだ高い評価は残ったであろう。しかし，彼は1976年に死んだ。そうして，今このような有様である。”

陳雲をして言わしむれば，文化大革命は，破壊だけを残して，建設的な何物をも残さなかった，その要因はいろいろあるにしても，最終の責任は毛沢東自身にあると指摘しているのである。

中国プロレタリア文化大革命に対する，内外の批判（非難をふくめて）と評価は，漸次拡大してきているが，最近中国当局の発表した，民衆の声（要望）を総括してみると，次のようなものとなる。

1. 中国文化大革命は，中国共産党のすぐれた伝統を破壊し，社会主義の法制を乱し，人民の基本的権利をはく奪して大きな混乱を引き起した。

   教育面では，文盲を養成し，文化面では，数千年の文化遺産をこわして，一切の外国作品に反対した。

2. 国民経済に与えた損失はさらに大きく，鉄鋼生産は減退，農業は減産，生活水準は低下した。

   労働に応じて分配する，社会主義の原則を否定。仕事をしても，しなくとも同様で，大衆の社会主義的積極性を押えた。

3. 文化大革命は，一部の悪い者を増長させ，人間を抑圧した。

4人組や，党中央文化小組の連中は，文革がなければ，あのような高い地位につけなかったろう。

彼らは武闘を挑発して，人民に対して専制独裁を実行した。文革に成果ありとすれば，革命精神（四人組批判を通じて）を促進したことである。

4. 中国文化大革命は，中華民族にとって空前の活動であったが，民族的災難であり，歴史上の大後退である。

現在は，ある種の策略により文革を肯定しているが，必ずしかるべき評価が出てくるであろう。（傍点は筆者）

この最後の傍点のところ“現在は，ある種の策略によって，文革を肯定しているが，必ずしかるべき評価が，出てくるからであろう”を取りあげてみると，中国民衆の文化大革命批判毛沢東批判は，時間の経過とともに激しさを増すものと予想される。従って，これに対して，現北京政府当局（鄧小平—華国鋒体制）が，どのように対処していくか？　その点が今後の問題となるであろう。

重ねて言うと，毛沢東の発動した文化大革命は，党の官僚制打破という社会変革をねらったものであったが，その基本には指導者は“大衆に学んでこそ，はじめて大衆の教師”になれるという，人間の生き方に関する信条があった。かの三大差別＝都市と農村，工業と農業，精神労働と肉体労働を，失くそうという平等主義は，何よりも先づ人間の意識のもちかたの問題である。

毛沢東は，人間は学習によって，思想が改造されるものと信じたオプチミストであり，いわゆるロマンチストであった。彼にとって政治とは，倫理とわかちがたい教育であったのである。

文化大革命のパラドックスは，伝統的シナの残存物を絶滅すると呼号しながら，その絶滅の過程の中で，歴史的遺産が，きわめて強烈に現われてくるということを示した。

歴史的に見て，中国は世界から切りはなされ，3000年の文明をもち，漢民族10億の人口を擁する大衆団であり，そこではヨーロッパ産のマルキシズムは，儒教の伝統という繁げり繁げった大樹の，一部のつぎ木にしかすぎないのではあるまいか？

毛沢東の人間と思想の形成において，儒教その他の伝統的なものが，きわめて強烈に影響しているということ。そして，その認識に立ってこそ，文化大革命が提起しているクローバルな問題の核心に，ふれることができるように思われる。

注

（3） 文革の被害

1978年12月の“三中全会”において，中国当局は，1966年から1969年までの間に，40万人以上が殺害され，約1億人が直接，間接に迫害されたと発表しており，その被害の大きさと深さがわかる。

（4） 上海コンミユン

1966年11月，紅衛兵が，北京から文化大革命の宣伝をもってやってきた。上海の労働者は，工人革命造反指令部をつくって，上海当局と対峙した。1967年1月，造反派は，上海市党委員会の権力を奪取し，上海コンミユン（上海人民公社）臨時委員会を結成して最高機関とした。

しかし，毛沢東は何故かコンミユンの結成に賛成しなかったので，結局，改心の革命幹部と労働者（民衆）の代表と軍の代表の三者連合による，革命委員会が結成されて，収拾調整に当った。以後この方式が全国におよんで，ここに，コンミユン結成の夢は瞬時にして消え失せたのである。

毛沢東は当時において，コンミユンと党と国家の関系について，見透しがつかなかったために，決断をためらったものと思はれる。

3. 史記の世界から現代へ

最近の中国（ここ 1.2. 年）の政治情勢の，めまぐるしい変化を見つめていると，この国は，やはり“史記の世界”であり，“孫子・六韜三略”のお国がらのように思われるのである[1]。

ヨーロッパ的現代史観や近代的科学分析法をもってしては，解明できない分野が，あまりにも多いということに気付くのは，私だけではあるまい。わが国のチャイナー・ウオッチャ（中国観察者）たちの中には，“現代中国を知るには，新しい中国の著作を読むだけでは不充分で，むしろ〈三国志〉を読んだ方がわかりやすい。例えば，文化革命後における林彪事件などに見られる。激げしい権力闘争の中には，三国志を思わせる権謀術策が多く見られる”と指摘する人たちが少なくない。

事実，現代中国における政治闘争が，たえず歴史上の人物や作品の評価に結びつけてなされてきたし，また，なされているという現象は，われわれが中国を理解する場合に，その歴史的文化的伝統を無視できないことを教えている。

中国の伝統的思想をふりかえってみると，儒家，道家，法家，および孫子，墨子にいたる諸子百家のなかに，あらゆる種類の思想のパターンがあることがわかる。従って，必要に応じて，これらを引用することは自由であり，しかも，いくとおりの解釈も可能である。自己の主張に都合よく理論化して対敵を論駁することもできる。借古批近（古事を借りて現状を批判する）のは，歴代王朝の士太夫たちが，好んで行ったところであり，共産中国の（文人官僚）の指導者たちも，同様に，とくとくとして行っているのである。それは，歴史の必然なのか，それともカリカチユアなのか，問うまでもないが，いかに伝統の影を深く残こしているかが，うかがわれる。

われわれは，その伝統の深いということの中に，中国現代化の足をひっぱる，あらゆる要素（思想的，文化的，社会的フアクター）のあることを，先ず認めねばならない。

1976年９月，毛沢東の死去，それにつづいて，四人組の逮捕（1976年10月）とその勢力の一掃（1977年８月，中国共産党第11回大会）とつづき，流血と恐怖の文化大革命は一応終結した。それを契機として，いろいろな形での毛沢東批判の声をきくようになったことは，周知のとおりである。

しかし，故毛沢東の文化大革命における誤謬を，今ここで，いくら厳しく批判してみても問題の解決にはならない[2]。何故なら，毛沢東に対する個人崇拝を許し，林彪・4人組の専制を許して，何百万，何千万の人びとをまきこんだ，文革の狂気と混乱の根源は，実は，権力の派閥闘争の人間対立関係にあるのではなくて，中国の社会そのものの中に根強く残存する，封建的遺制によるものだからである。

中国は，19世紀半ばからの国際情勢の変動と圧力の中で，資本主義発展の芽をつみとられた。そして，資本主義的合理的改革によって，前近代を揚棄（アウフヘーベン）することなく，いきなり社会主義革命への階段をよぢのぼったのである。その結果は，いかに多くの前近代的残渣が，社会主義の名の下に再生産されたか！　文化大革命の混乱の中においても，ひきつづいて現在の時点においても，党・政府幹部の特権階級化の問題が，しばしば指摘されるのは，問題の根の深さをしめすものである。この点に関する中国アナリストの分析によれば，それは1に，毛沢東，林彪・4人組の執政の中にみられる，封建的遺制（家父長的支配体制）であり。2に，文化大革命期の民衆の狂気の中にみられた。アナーキーな農民一揆（農村バルチザン）的思考であると，指摘している。

毛沢東の中に，秦の始皇帝のイメージを見出した者は，林彪その人だけではなく，多くの外国の観察者もそれを認めている。林彪・4人組の行動は，資本主義とも修正主義とも無関係な封建的暴力のそれであり，有産者，有識者，有権者をたたきのめして，平等化を求める造反は，ブルジョア革命以前の農民反乱のパターンに類似している。

文化大革命は詮ずるところ中国伝統の〈大同思想〉[2] が側面的にあらわれ，富者を奪い，貧者を救い，倉庫を解放して米を分配し，平均化することに熱心ではあったが，肝心な生産を組織して，政治を固めて，人民を安定させることを忘却してしまった。中国の平等の観念と平均主義と，そうした内容をもつ宗教的信仰は，治国平天下の建設期においては，逆流となって作用したということである。

劉少奇元国家主席の盛大な葬儀は，1980年4月7日に北京において行われた。これによって修正主義者，裏切者，売国奴などといろいろな悪名のレッテル（それは毛沢東によってつけられたものである）は取りさられ，完全に名誉を回復した。このことは裏返せば毛沢東のもろもろの誤ちをみとめたことを意味する。ただし，現時点において直接的毛沢東批判をさけているのは，政治的配慮によるものとみてよい[3]。

しかし，重要な問題は今後にある。中国の現代化が物質的経済的分野だけではなく，人間と社会の現代化，法と秩序の確立，党独裁と社会主義民主制のバランスの問題，すなわち思想面（指導理念の再構築）における新たらしい展開が要望されてくるであろう。そのためには，従来のように，マルクス・レーニン主義，毛沢東思想（連続革命論）などの形而上学的公式主義理論と訣別して，それこそ“実事求是”[4] に基づく実際的建設的発展が見られなければならない。

中国の現代化のためには，何よりもイデオロギーとしての毛沢東思想を如何に処理してこれを超克するかという点にあると思う。しかし，毛沢東思想を今ただちに捨てさるのは無益であり，また危険でさえあろう。したがってそれは，儀式に必要なものとして，実生活とは無関係なものとして，上手にとりあつかわれることとなろう。聰明な北京政府の指導者たち，周恩来のよき後継者たちは，すでにその方向に歩を進めているようである。

注

（1） 注司馬遷の著書。前漢初期になる。黄帝から前漢の武帝までのことを記した，紀伝体の史書。本紀12巻。世家30巻，列伝70巻，年表10巻，書8巻，合計130巻。中国の綜合的歴史書である。わが国のシナ学の泰斗，内藤湖南博士は，中国を知る必語の書として推賞した。

（2） 大同社会（大同世界）
礼記の礼運篇に，大同理想とは，和と均を重視する。和諧と均衡の意味であるとす

る。尚書にいう協和万邦である。孔子も“少なきを患えずして，均しからざるを患う”と指摘している。礼記にしめされた古代中国のユートピアのこと。

（3） 毛沢東の誤謬を，現時点において直接批判をためらっている事由として，中国の観測筋は次のように指摘している。1. 今おこなえば，建国以前の毛沢東に傷がつく。2. それは共産党そのものにも傷がつく。3. 現代化路線反対派に抵抗の材料をあたえる。4. 間接的批判で大衆はもう充分知りつくしている。5. 社会秩序の維持のために。

（4） 実事求是

事実に立脚して正しさを求めること，今日の言葉でいえば，客観的科学的方法によるということにほかならない。主観主義を排撃し，充分な調査なくしては発言権なしとするもの。清朝の考証学のモットーを採用したもの。

〈1980年5月30日・追記〉

《参考資料》

前号（中央学院大学論叢第13巻第1号）に掲載した諸文献のほかに，次のものを追加利用した。

1. 中嶋嶺雄“中ソ対立と現代” Basic Study on the International Environment 中央公論社，1978年12月。
2. 野村浩一“毛沢東”講談社，1978年9月
3. 滝沢 毅“中国革命の虚像”三一書房，1979年5月。
4. 藤田 勇“講座史的唯物論と現代，第6巻，社会主義編”青木書店，1979年6月。
5. 中華人民共和国 北京，北京周報社発行“北京周報”1979年， No. 24,25,26.各号。